

聖書：ローマ 12：9～11

説教題：愛に生きる

日時：2016年5月1日（朝拝）

パウロは12章から私たちがささげるべき感謝の生活について書き始めています。1～11章では神の素晴らしい救いについて語られましたが、それを見て来た私たちはどのような生き方をもって神の恵みに応答すべきでしょうか。12章1節と2節は、そのエッセンスを述べたものでした。そして前回見た3～8節では、神がおのおのに分け与えてくださった賜物を良くわきまえて、それを一つのからだと表現される教会全体の祝福のために一生懸命用いるようにと言われました。それに続く今日の9節以降で語られていることは何でしょうか。それは一言で言って「愛」です。この「愛」というテーマが「賜物」というテーマに引き続いて語られる点は1コリント書とよく似ています。1コリントでは12章で賜物の問題が論じられ、次の13章にあの有名な愛の賛歌が出て来ます。その1～3節では、愛がなければ、たとえその人が御使いの異言で話しても、あるいは山を動かすほどの信仰を持っていても、あるいは持っているもの全部を貧しい人たちに分け与え、その体を焼かれるために渡しても、何の値打ちもない、何の役にも立たないと言われています。物事を価値あるものにするのは、そこに愛があるかどうかであるということでした。今見ているローマ書でも、3～8節で賜物のことが語られましたが、それを価値あるものとするのは愛であるということでしょう。この「愛」に関することがこの後21節まで語られて行きます。今日見る9節から始まる文章はギリシャ語では13節まで続く文章になっていて、そこまで一緒に見る方がまともは良いのですが、分量が多くなるため、今日は11節までとし、来週12節と13節を見たいと思います。

さて9節は、この後21節までのテーマとなる御言葉です。「愛には偽りがあってはなりません。」ここで使われている「愛」という言葉はアガペーという言葉です。「愛」を表すギリシャ語にはいくつかありますが、当時比較的まれにしか使われなかったこのアガペーという言葉は聖書記者たちは自分たちが経験するようになった神の愛を現わすために用いました。この手紙でも5章8節で次のように使われました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(5章5節も)。あるいは8章最後の勝利の賛歌のクライマックスの部分でも「高さも、深さも、そのほかのどんな

被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と使われました。これと同じ言葉が12章9節では私たちの愛を表すのに使われています。これは神の愛を知り、これを受け取った者として、私たちもその愛に生きるべき者たちであるということでしょう。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネの福音書13章34節）

この愛の実践において偽りがあってはならないとパウロは言います。これは直訳では偽善的なものにしてはならないということです。「偽善」という言葉は「仮面をかぶる」とか「役者を演じる」という意味の言葉です。中身は違うのに外側だけ役者を演じるような見せかけのものであってはならない。英語の聖書の中には肯定的な言い方で訳しているものもあり、それはこの愛が「純粹であるようにせよ」と訳しています。ここに大切なメッセージがあります。それはアガペーという言葉で表現されている神の愛と同じ愛を今や私たちも持っていることがここで前提にされているということです。私たちはとても自分はこのような愛では愛せないと思うのでしょうか。Iヨハネ4章19節：「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」ここにも私たちの愛は、神の私たちに対する愛を反映するもの、同じ種類のものであることが言われています。その前提に立って、そこに偽りがないようにせよ！とされているのです。もしそれを偽善的なものにするなら、愛の共同体である教会が偽りの共同体、見せかけの共同体に変わり果ててしまいます。

これと結び付いているのが9節後半の「悪を憎み、善に親しみなさい」という勧めです。しばしば「愛」を大事にする時、ある人々は正しいかどうかは二の次と考えます。愛する人のためには悪いこともするとか、愛する人のためには正しいことも無視するとか。しかし神の愛はそういうものではありません。本当の愛は悪を忌み嫌い、善とピッタリ結びつくことと両立します。ですから相手を大切にするあまり、本当は良くないことだけれどもと言いながら何かをしてあげたり、相手が望むことに同意するのは誤りであるということです。たとえ愛する人が語ることで、正しくないならその悪には嫌悪感を示し、逆に正しいことは積極的に評価することが真の愛と一致するのです。そのことを通して私たちは神から頂いた愛を偽善的なものにせず、純粹なものとして保ち、そこに生きることができるのです。

2つ目に見るのは10節です。「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、云々」。ここで使われているギリシャ語は「家族の間にある愛」「肉親同士の愛」を指す言葉です。主にある者たちはまさにそういう関係にあることをこれは思い起こさせてくれます。教会では同じ主を信じる仲間を兄弟姉妹と呼び合います。初めて教会に来た人は違和感を覚えるかもしれません。しかし私たちはまるでそうであるかのようにこの言葉を使うのではなく、実際にそうであるからこの言葉を使います。神を父とし、主イエスを私たちの兄上とする神の家族なのです。そしてこれはやがて天で共に住む永遠の家族です。私たちはそのことを実際に感じます。これは大変不思議なことでありクリスチャンの特権ですが、初めて出会った人でもお互いの信仰について語り合っていると、相手と自分がただならぬ絆で結ばれていることを思わずにいられません。何十年も昔から一緒に生活して来たかのような関係にあることを感じます。パウロはその家族としての特性、兄弟愛の特性をいよいよ豊かに発揮せよと言います。そういう性質を頂いていながら、一方では残る罪のために必ずしも理想的な状態にない私たちはこのように改めて勧められる必要があるのです。

そしてこの具体的な実践として10節後半には「尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」とあります。ペリピ書2章3節の「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。」というみことばも思い起こされます。しかしこの10節後半の御言葉の理解の仕方にはもう一つのあり方があります。それは「尊敬することにおいては、お互いに先を行きなさい」という訳です。すなわち人から尊敬されるよりも先にあなたが他の兄弟姉妹を尊敬しなさいということです。口語訳は「進んで互に尊敬し合いなさい」と訳しています。言い換えれば誰かがあなたを認め、あなたを賞賛してくれるのを待ってはいならないということです。私たちは元来、人の良い所を見つけるよりも、自分がどれだけ良くやっているかに注目するものです。そして自分が十分に認められ、感謝されないと怒るのです。しかし皆がそのように自己中心的に考え、不満を抱くだけだったら、決して良いことは起こらないでしょう。ですからパウロは相手を尊敬し、評価することにおいて他の人の先を行け！と言っているのです。これはもちろんお世辞を言い合え！ということではありません。前回見ましたように神は一人一人に必ず賜物を与えています。それぞれが必要で無くてはならない重要な器官です。ですから一人一人には必ず賞賛すべきと

ころ、感謝すべきことがあるのです。そのことを正しく認めて、率先して尊敬せよと言っているのです。そのように努めることによって兄弟愛を深め、互いに益々一つに結ばれ、神に栄光を帰す歩みが導かれるのです。

三つ目に見るのは11節です。ここには短く3つのことが述べられています。まず一つ目は「勤勉で怠らず」。ここで「勤勉」と訳されている言葉は8節に出て来た「熱心」と同じ言葉です。その熱心において弱くなるな！しおれるな！という意味です。私たちはそうなりやすい者です。ある時は一生懸命でも、ある時はそうでなくなる。熱しやすいが冷めやすい。いつのまにか怠惰になる。これは何についての言葉でしょうか。この12章は神への応答の生活が述べられているところですから、その神への応答の生活において怠惰になるな！ということと言えます。またより直接的には直前で言われた「互いに愛し合う命令」についてと言えます。兄弟愛をもって互いに愛し合い、率先して尊敬を表し合うという取り組みにおいて怠惰にならず、常に熱心でありなさい！と。

そのカギとなるのが次の「霊に燃え」という部分と思われます。この「霊」は私たちの霊のことか、それとも聖霊を指すのか、学者の間でも議論がなされて意見が分かれています。どちらであってもそこに聖霊が関与しているという点は同じでしょう。たとえば私たち自身の霊が燃やされるとしても、良いものはみな聖霊によることです。参考になる御言葉としてIテサロニケ5章19節に「御霊を消してはなりません。」とあります。ここにクリスチャンはみな聖霊による火を点火されている人であることが示されています。もちろんその外側への現れ方は人によって色々です。神の民の中にはペテロのような熱血漢もいれば、ヨハネのような思索の人・思想の人もいます。パウロのような情熱的な伝道者もいれば、バルナバのような慰めの伝道者もいます。皆が同じタイプでなくて良いのです。現れ方は多種多様で良いのです。しかしすべてのクリスチャンの内には聖霊がおられて聖霊特有の火を燃やしてくださっています。それはキリストにある神の愛を知ることから来る炎でしょう。その聖霊の火を私たちはある意味で消すことができるということが先ほどの御言葉に暗示されています。エペソ書4章30節の「神の聖霊を悲しませてはいけません」という御言葉も思い浮かんで来ます。ですから私たちはそうならないように努めなくてはなりません。むしろ頂いている炎が益々大きくなり、それが自分に一層良い影響をもたらすように努めなくてはなりません。どうすれば良いでしょう。それはまず聖霊の存在を認め、感謝することでしょう。そして聖霊に祈るこ

とでしょう。そして聖霊が用いる第一の手段は何と言っても聖書の御言葉ですから、私たちは炎の燃料となる御言葉を自分の中に取り入れる。そのことを経て聖霊は力強く私たちの内に働かれるのです。私たちは自分で自分の心を燃やすことはできなくても、聖霊によって新しい力に導かれ、霊に燃えて歩むことができるのです。

そして最後に「主に仕えなさい」とあります。しばしば聖霊を強調する人は神秘的な体験を求めてどこに行くか分からない人になってしまいがちです。しかしパウロはここで霊に燃える人は主に仕える歩みに行き着くというポイントを押さえているのです。あるいはパウロはこの言葉によって、今述べている事柄はすべて「主に仕えることなのだ」と言っているのかもしれませんが。これらを行なうことは私たちが愛している主に仕えることである。そのことを思い、主に対する感謝と献身の現れとして、互いに愛し合う実践に取り組みなさいということです。

続きは来週見ます。私たちが今日心に留めたいことは、神の愛を知り、神の愛を受けた者として、その愛に私たちも生きるように！と勧められていることです。聖書が語る最も大事な戒めも、イエス様が答えられたように「神を愛せよ」と「人を愛せよ」の二つでした。神の恵みに対する私たちの応答のエッセンスはまさにこの「愛」です。聖書は色々な箇所これを私たちに命じています。私たちはそのことを繰り返し聞いて頭では理解していると思いますが、実際生活ではどれほど自分のテーマとして、しかも最重要テーマとして、取り組んでいるでしょうか。そこに歩むためにこのパウロの言葉一つ一つを心に留めたいと思います。頂いている愛が純粹なものであり続けるように！そのために悪を憎み、善に固着するように！兄弟姉妹を天の家族として愛し、互いに率先して尊敬するように！自分の怠惰な傾向と戦い、聖霊によって霊に燃え、愛する主に仕えるように！この一つ一つを自らの課題とし、祈りつつ取り組み、頂いた光を益々映し出して、主の栄光を現わす歩みを導かれたいと思います。